
とある科学の能力記憶

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力記憶

【NZコード】

N8162Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

一步通行が2か月前出会ったのはとある実験によりボロボロにされたレベル4の少女、小鳥遊双葉だった。何故か双葉は義理の妹として部屋に居候（だけど金はちゃんと払ってる）することに。一方通行がお兄ちゃんというとんでもない設定ですが、なんか書いてると楽しい。凄く楽しい。読んでると楽しいのもshireない。そんな小説です。あと作者は義理妹とか妹とか妹設定が好き。とある魔術の禁書目録S.S.

第一話 一方通行と妹 なんでこいつはこんな扱いこくいンだ？

現在、巷はドキドキワクワクの寝ても怒られない5円のビックイベント、GWの真っ最中である。

しかしそんなことは、一方通行にとってどうでも良いことだった。

今は、それより。

有り得ない、といつも朝に一方通行は恒例行事の様に思う。のそりとソファの上で体を起こした彼は、台所の方へと皿を向けていた。

そこでは、可愛らしい少女が朝ごはんを作っていた。

「……有り得ねエ

「あ、お兄ちゃん起きた？」

一方通行が起きたのに気づくと、少女は嬉しそうに机の上へ駆け寄ってきた。

「朝ごはんもうすぐできるからね。ちょっとまつててね

一方通行の脇にたたんでおいた服を置き、もう一度ぱたぱたと台所で駆け回る少女。

少女の名前は小鳥遊双葉。たかなしふたば 中学 正確に言つながらば常盤台中学の2年生である。

そして、かなり優秀なレベル4の一人、なのだが

「有り得ねエ」

一方通行はもう一度咳いてソファに 台所の様子が目に入らな

「いよいよ反対側をむいて　もう一度横たわった。

あの様子を見ていると、ただの女の子ではないか。

その様子を田代とく見つけた双葉は「いらっしゃー！お兄ちゃん、早く起きないと健康に悪いよ？おひさまだよ？日がルンルンだよ？」と訳の分からないうことを口走る。

「つむせエ」

「お兄ちゃん、朝はん天ふらがいい？ハンバーグがいい？」

「朝から重たすぎだ」

阿保かこいちは、と一方通行は半眼になりながらものそそと起き上がり、冷蔵庫からコーヒーを出して口に含んだ。

双葉はほえーと間抜けな声をだして「ブラックとはお兄ちゃん凄いねー」と感心している。そんな彼女は砂糖と牛乳をいくらいでも苦い苦いとコーヒーが一切飲めなかつたりする。

こんな生活もこれで2ヶ月目に入った、と一方通行はうんざりした。

「オマエ、出でこいつとは思わねエの？」

「全然」

屈託の無い笑みで答えられてしまった。一方通行はわずかに黙り、そして

「殺すぞ」

「んー、いじょ？出来るものなら」

「……」

その挑発に、一方通行は双葉の体に触れよつとした。
が、出来ない。

「……チツ」

「うん、お兄ちゃんは優しいもんね」

「……飯係が居なくなると思い直しただけだ」

双葉は笑つて一方通行にお皿を渡した。その上には先ほどいつていたハンバーグや天ぷらから、なぜか肉饅まで載つていた。

「……オマエ、ちょっとはバランス取りやがれ。なんで洋・中・和の三点セットなんですかア？おかしいンじゃねエ？」

「えー、なんか冷蔵庫に残つてたのそれしかなかつたんだもん。しようがないよ」

「朝からマジ重いなア テメエの作る料理は」

一方通行は文句を言いながらもテーブルできちんと最後まで食べた。その様子に、双葉は一〇一〇と笑つて

「お兄ちゃんはえらいねえ」

「……殴ンぞ」

双葉は一方通行の暴言には一切動じず、お皿を台所へ持つていつて洗つてしまつた。

「どうもこいつはやりにくい。」

一方通行は着替えを済ませるとドアの方へのつそりと恭ぎだした。

「あれ？お兄ちゃん外出？双葉も行こうかな」

「くンな」

「ん。分かつた」

なんでこんなときだけ聞き分けがいいんだよ、と一方通行は突つ

込みたくなつた。

扱いにくい。それに、妙に素直。

それが一方通行がはじき出した、小鳥遊双葉への人柄だった。

「お兄ちゃん、無駄な喧嘩はよしてね」

「……うるせー」

「そういうときのお兄ちゃんはよく聞くもんね。じゃあ、いつてら
つしゃい」

「……あア」

ムスツとした顔の一方通行が出ていくと、双葉はエプロンを外し、短パンに半袖というラフな格好になる。それから、することもないので部屋のお掃除をすることにした。それが終わったら少なくなってきた食料の買出しに行こうと頭の中で予定を組み立てる。

小鳥遊双葉。まだ中学生だが今すぐにでもお嫁に行ける家事能力を身に付けていたりする。

一方通行はまだ朝になつたばかりの街をふらふらと歩いていた。別に目的があつたわけではないが、しかしあの家にいるよりは外に出たほうが楽だという理由だった。

あの小鳥遊双葉という少女は、2ヶ月ちょっと前の2月後半に出会つた。

何故だか一方通行になつてきて、部屋の前まで付いてきた拳句家から締め出すと朝起きたら玄関の前で寝ていた。マンションから放り出しても朝起きれば必ず玄関前にいる。完全な不審者だった。もしこの場合、一方通行が女で、双葉が男であつたら捕まつてい

たのは双葉のほうであつた。が、生憎と一方通行は男だつたし、双葉は しかも可愛らしい 女の子だったので、『近所さんから の目が痛い痛い。普段はそんなことを気にならない彼だが、連日色々な人に「君、あの子放つておくつもりかい?」 「知り合いなんだろ? うつ? 助けてやりなよ』と言われ続け、腹が立つたので家にあげさせた。次に、双葉は『金を払うからここにすませてくれ』と頼んできた。断つた。次の日には法律上義理妹になっていた。なぜだ。でもまあ家事をやつてくれるし便利ではあるので一応今は追い払うことをしなくなつた。毎日朝から作る重い料理はかなり迷惑だが。

「チツ……

舌打ちをする。それでどうにかなるわけではなかつたが、取り敢えず気晴らしだ。

そこらへんを彷徨いている不良にでも苛々をぶつけるか、と思つたが出てきたときに『無駄な喧嘩はしない』と約束してしまつたので何となくやりすら。

一方通行はやはりそれにも苛々して目の前に置いてあつたバイクを蹴り飛ばした。バイクは一瞬にして鉄塊に成り果てる。

一度双葉を殺してやつたほうがいいかもな、と彼が物騒なことを考えていると

「あー」「オイオイ兄ちゃんないにしてくれちゃつてんですかー?」「オレらの大好きなバイクが台無じじゃねえか」「金払えよ」「ヒヤツヒヤツヒヤツ」

「取り敢えず殺そげ」「いいないいな」「ことで兄ちゃん手合わせ願いますよ」「ヒヤツヒヤツ」「

後ろから、低俗な声がかけられた。

彼はめんどくさそうに一度舌打ちし

いいチャンスだとばかり

後ろを向いた。

そこには、がらの悪い大学生風の男達が数人。

喧嘩を売られたンだからしょうがねエよな。

そう勝手な理屈を付け、苛々をぶつける対象を見つけた彼は、獰猛に笑つた。

「じゃ、じぢらじこヨロシク頼みますよオ　二下」

数分後、その場には地獄絵図が展開されることになる。

兄がそんな憂さ晴らしをしているとは露ほど知らず、双葉は掃除を終え常盤台の制服に着替えた。

外出時には常盤台の制服を着るよう~~に~~といつ規則を眞面目な彼女はきちんと守つてしたりする。

彼女はるんると上機嫌で鞄を持ち、部屋から出た。

革靴の足音が、カツカツとテンポ良く、踊るように打ち出される。

1時間程で不良たちの組織は壊滅した。

どうやら一方通行が喧嘩を売られた（と思つてゐるのは彼だけであり、傍から見れば普通に彼が喧嘩を売つてゐる）不良たちは結構大きい組織の一員　スキルアウト　だつたらしく、仲間の敵討ちか何だか知らないが一方通行に大量の喧嘩をふつかけてきた。

これ幸いと一方通行も喧嘩を買う。おかげで、かなりの苛々がこ

の1時間で解消された。

スキルアウトに感謝するなんて考えもしなかつたぜ、と一方通行は小さく奥の方でクックと笑った。

と

「へー、君結構可愛いね」「おいまだ蜃だぜ」「お兄さんと一緒に遊ばない?」「何時になるんだよ」

おや、まだ残党が残っていたのか、と路地裏で不良たちがたむろつている所へ一方通行が覗いてみると

双葉がいた。

「……チツ」

不良に囲まれた双葉は別に怯えてはないものの、戸惑っている。彼女はレベル4だ。見るとこらあの不良たちの能力はさして高そうにも見えず、同じレベル4でも、双葉にかなう相手など一人もいないはずだ。

レベル4の中でのトップ。それが小鳥遊双葉なのだから。で、なぜ彼女が戸惑っているかというと、それは彼女の優しさからくる。

能力を使えば一発なのだが、それを使つていいか分からないというか、使つたことにより怪我をさせるのが申し訳ないらしい。どうせ後で治してやるんだからいいんじやねえか、と一方通行が呆れたほどだ。

ついでに、双葉を取り囲んでいる不良たちは双葉が戸惑っているのを力が弱い、または攻撃系の能力ではないため反撃できないつまり、ただの女の子と変わらないと思つてゐるらしく、見るからに鼻の下を伸ばしていた。

「ねえ、君何年生?」「それ常盤台だよね?」

「中坊にじゅや中々悪くない顔立ちだな」「俺好み」

そんな気持ちの悪い言葉が風に乗って聞こえ、一方通行は顔をしかめた。

そして、双葉をさつと連れて帰ろうと彼が足を踏み出したら瞬間。

「い、いめんなさい」

その瞬間、双葉を取り囲んでいた不良達がボワッと仰け反った。小範囲の爆風でも起きたのかもしれない。

「なっ、てんめ…っ」「オイ、こいつやるぞー!」

「皆でかかれば大丈夫だ」「何といってもただの女だしな」

双葉は眉を下げた。それにより、不良たちはさらに興奮する。大方、双葉が自信を無くした、とでも思ったのだろう。自分たちならばこの少女を簡単に潰せるとまで思ったのかもしれない。

が、違う。

双葉は、やはり相手が怪我をすることを、申し訳なさがっていた。

「あの、怪我したくないなら……どうかへ行つた方がいいと思いますけど」

双葉の忠告に「なんだろゴルア!」と不良たちが色めき立つた。双葉には申し訳ないが当たり前である。

「えと、じゃあ、んー……」「い、ものが多いんですね」

双葉のつぶやきに、不良たちは「はあ？」という顔をした。
そして、双葉は言つ。

「なので、物でもぶつけてしまつて頂きます」

その瞬間、不良たちの頭上には大量のバールやゴミ箱、何故か車の扉部分などが現れ、そして落ちた。

勿論、双葉は一歩たりとも動いていない。

ドガバキヤグキ、と嫌な音がしてそれらが男たちと共に地面へと伏した。

「……んー、路地裏、今度から使うのやめよ！」

「当たり前だろ、ンなもン」

双葉が男たちの怪我を治そうとしゃがみこんだと、一方通行が双葉の方へ歩きだしたのはほぼ同時だった。

双葉はえ？え？と困惑した顔を浮かべた後、

「お兄ちゃん！？なんでここにー？」

「たまたま見てた」

「えー、なら助けてよー」

助けなくとも自分でも対処出来るだろうが、と一方通行が吐き捨てるに、それとこれとは違うのーーと反論された。意味が分からない。

双葉はきょろきょろと不良たちを見渡し、主だった怪我をしているものの傍に駆け寄つて、その怪我に手を触れた。その瞬間、その怪我は消える。

「……”能力記憶”ねエ……」

一方通行は独りごちた。

爆風を巻き起こしたのは『風使い』の能力。

男たちの上に物体を表したのは『ムーブメント』の能力。

そして現在怪我を治しているのは『座標移動』の能力。

双葉が持っている能力は『マルチスキル』の能力。

双葉が持つている能力は『多才能力』ではない。むしろそれを逆手にとったような能力である。

『『能力記憶』』スキル・メモリー。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能
力』

つまり、言い換えるならば”多才能力を作るための能力”とでも
言つべきか。

滝壺とは根本が似ているものの、実際にはかなり遠い。

つまり双葉が持つているのは、”他人の能力をコピーする能力”
なのだから。

反則技とも言える能力である。一人で学園都市全員の能力者
勿論レベル5の力は再現できないが、
不可能ではないはずだ。

だからこそ、彼女は『レベル5候補生育成プログラム』の一人に
抜擢され、一番優秀な成績を収めたのだろうから。

が、今のところそういうのはどうでもいい、と一方通行は思つて
いる。

だから、今は。

「オイ、帰ンぞ」

「あつはーい！」

双葉はぱたぱたと一方通行の方へと駆け寄ってきた。

一方通行はそれを待たず、さき先行つていしまうが、双葉はその

距離を空間移動で詰めた。

二人は、仲良く 結構一方的に
だった。

家路へと帰ることになるの

第一話 一方通行と妹

なんでこいつはこんな扱いにへいんだ？（後書き）

感想評価、頂けたら嬉しいですー。ちょっと滝壺のところ曖昧かも…。』
指摘頂けたら嬉しいです！

第一話 夜中のたわごとのない事件

お兄ちゃんって優しいんだなー。(前編)

2話、ちゃんと金端塗りもした!

第一話 夜中のたわいのない事件 お兄ちゃんって優しいんだなあー。

双葉は一方通行の上に毛布をかけようとしたが、その毛布が跳ね返されてしまった。

現在は夜である。GWの最終日。双葉がいつものように 今はたまたま義理兄が見ていたが 不良を倒した日から2日後。一方通行は毛布もかけずソファでさつさと寝てしまったので、風邪を引いてはいけないと思った双葉は毛布をかけようとした、ら跳ね返されて今の状態にある。

毛布が飛んできた急いで若干ジンジンと痛む指先を抑えつつ、双葉はいつものように能力を使つた。

「右手、エレクトロマスター発電能力、左手、バイロキネシス発火能力」

双葉が呟くと、右手には電気がまとわりつき、左手の掌の上には小さな炎が浮かび上がった。

成功、と双葉は嬉しそうに笑う。

これは毎日の日課。一方通行が寝た後に行つ自主トレだ。

一度に複数の能力を発動するのを鍛えるための特訓。

「体表にはオフショアーマー窒素装甲を開く」

もう一度呟き、また新たな能力を発動させる。

そして左右の（能力が発動したままで）手を自分の体に押し当てた。

「……よし

かなり危険とも言える行為だったが、双葉には一切の傷がない。当たり前だ、窒素装甲で体を守っているのだから。以前アイテムという暗部のグループのメンバーの一人と戦った時に得た能力で、双葉は結構重宝していた。発動優先順位がかなり高い能力である。

双葉は能力が”多過ぎる”ため、その中を自分で”決めて”、“発動”するのが苦手だ。なので、いつも”その時の状況に一番対処出来るもの”を条件反射で選ぶようになっている。が、それとは別に発動優先順位　つまりは突発的な状況で発動する能力のを何個か決めていて、”窒素装甲”はその一つ、ということだ。

双葉は一旦発動させた3つの能力を解き、ふーっと息をはいた。同時に発動するのはかなり疲れるのだ。三人がやる計算を一気に一人でやつてしまつようなものである。だからこそ、基本的には順番に発動するのしかやらないのだが。これを克服しないとレベル5になれないだろう、と研究社に言われた。

ま、順番にやるのはレベル4の能力者を順番に対処するみたいなモンだからなー、と双葉も納得した。

水を飲み、一息するともう一度双葉は能力を発動させようか。と、彼女は思う。

もしかして、いやずつと思ってて、やっぱりやめてたけどお兄ちゃんの頭の中を読んでみようか。

いやいや、やめなさい、と彼女の自制心がそれを止める。いやでも気になるー！と好奇心旺盛な部分が反論し「うわああああああっ！」なんか叫んだ。

その瞬間、高速で物が飛んできた。

「つぬせH

「『うひめんなさい』あ、あとあんまり置時計は投げないほうがいい」と思つ。」

双葉は投げられた置時計をなんなくキャッチし、ロトンドヒートブルに置いた。一方通行はチツと舌打ちする。

「だいたいなんだア？夜に練習とかイイ子ぶつてテメHは褒められたい優等生のつもりかよ」

「そういうわけじゃないけど……なんとなく、無意識っていうか。やらなきゃいけないみたいな？なんでだらうね。でも、お兄ちゃん五月蠅いなら音を反射すればいいんじゃ……」

「チツ、チカチカ光つたり風の向きが急に変わつたり　オレだからこそこそするんだよ」

確かにそうかもしれない、と双葉は思った。彼は^{ベクトル}方向操る能力者だ。ずっとベクトルが変わり続けたらつざこのかもしぬなかつた。んー、と双葉は唸り、

「じゃあ外にいってれんしゅ「テメHには黙つて寝るつていう選択肢はねエのかよ」

双葉は眉を下げる。

でも、多分今出でいつたら間違いなくこの義理兄は怒るので、おとなしく彼のソファの下つままり地べた

に横たわった。

一方通行はもう一度だけ舌打ちすると、今度は本当に眠りに落ちてしまった。

一方通行ははた、と気がついた。

そして体を起こす。窓を見ると、まだ今は夜中だった。

そう、人が絶対に出ていかない時間。なのに。

怪訝そうに彼は呟いた。

「……あの糞ガキはどうなに行つた……？」

あの少女は自分が言つたことを破つたのではないし、聞き分けはいい方だといふのに。

双葉の気配はこの家のどこにも見当たらなかつた。彼の寝ていたソファの横にも、台所にも。

「……チツ」

一方通行は忌避しげに舌打ちすると、無造作に靴を履き部屋を飛び出した。

双葉は彼のソファの横で目を覚ました。

ぱふ、と毛布の音をはためかせ、双葉はよいしょと起き上がる。

朝日が眩しい。もう朝だ。

いつもどおり着替え、そして支度をする。彼と自分の朝ごはんを作るために。

そこで、「あれえ……？」双葉は気づいた。

一方通行がソファから居なくなっていた。

「何でだろ……コーヒーでも買いに行つたのかなあ」

首を傾げつつも鳥肉をフライパンの上で裏返した。今日はフレンチっぽいものを作るらしい。やはり朝から重たいものを作る少女だつた。

その後もテキパキと朝ごはんを作り終え、エプロンを外した双葉はんー、と唸る。

ご飯が出来上がったというのに、一方通行はまだ帰つてこない。コンビニだつたら結構早くに帰れるのにねえ……と双葉が思つていると

バーン!という音がしてドアが破れた。

「あ、お兄ちゃん!」

双葉は一瞬でその犯人を看破する。それは自身の義理兄だつた。その義理兄は少し息を詰まらせ それからズンズンと双葉の方へ向かつてくる。

「どに行つてたのお兄ちゃん、もうどん飯できた ッツツー!?」「テ、メ、ヒ、ニ、ソ、ど、ニ、行、つ、て、た、ン、だ、ク、ソ、ガ、キ」

バシ!「ーン!と頭をチョップされた。
「えー?と双葉は目を白黒させた。

「なつ何かなお兄ちゃん!?す、凄く痛いんだけどー?」「うう、なんでそんな怖い顔で連續チョップなのー!?」

「はー!? テメエが夜中にどつか行くからこいつらは探しに行つてやつたつてのによオ! 何が”何かな”だ!」

「え？ それだとお兄ちゃん私を心配したってこと？」

「は、ア！？ 違よ！ テメの思考回路はどうなつてやがるー。ついで話逸らすンじゃねー。」

話を逸らす、と言われてしも。と双葉はチョップされつつ首をかしげる。

「だつて、お兄ちゃんの言つてることが良くわからないんだもん」

「……はア？ テメが夜中に出歩いたせいで」

「だから、私昨日の夜に外に出歩いてなんかないよ？」

「……」

一方通行は目を開いて驚いた。

チョップが止まつた隙にちょっとだけ双葉は一方通行から距離をとりじんじん痛む頭を両手でおさえた。

「……夜中に、出て行つてない、だと？」

「うそ」

双葉が嘘をつこていないと分かつたらしい一方通行はそのあときちんと朝ごはんを食べ、また寝てしまった。

その寝顔を見ながら双葉は学校へ行く準備をする。

お兄ちゃん優しいところもあるんだなあー、とちゅうぴりにやいやしながら。

「じゃ、お兄ちゃん行つてきます」

声は帰つてこなかつたが、双葉は何故か満足だった。
常盤台への道は、いつもよりかなり明るく感じられた。

双葉の常盤台での友達はたった一人しかいない。

そういうとかなり寂しい人間に見えるが、意外とそうでもなかつたりする。

理由は、双葉は一人なのを寂しいと思わない」とと、その一人が親友であり、他には誰も必要ないということだ。

「美琴」

「あ、双葉」

学校の門で双葉はその親友 美琴にあつた。

御坂美琴。兄と同じレベル5の超能力者。双葉にとってそれは憧れの存在というよりただの同種 または同族好意 なのだが、そういうのを一切関係なく、美琴の人格が双葉は好きだった。

「今日ね、お兄ちゃんがちゃんと朝から起きてくれたんだよ」

「へえ、よかつたじゃない」

美琴は双葉に義理の兄がいるのを知っているが、それが誰かは知らない。

双葉も教えないわけではなく聞かれないから答えない。

それに、普通友達の兄が凄い人だなんて想像は巡らせない。

「そういえば、白井さんは？」

「黒子？ 黒子ならさつき風紀委員の人連れて行かれたけど……なんか事件があつたみたい」

「ふうん……？」

双葉と美琴は日常会話を交わしながら教室へと入っていく。
と、その途中で

「何よ、あたしが先にこの子を勧誘したんじゃなーいっー。」
「え。えと、その……」
「ふふ、とつた者勝ちでしょ、普通は」
「とつ！？あ、え……？」
「なんですかー！？」

喧騒が聞こえた。

廊下のど真ん中でなにやらいい争いをしてるらしい。

「……多分、聞く限り派閥争いだよね
「どいつもこいつも。好きねえ」

美琴と双葉は顔を見合わせて嘆息した。そして、美琴は「はーい
はー」と間へ割り込む。

「とつあえず、道の邪魔になってるから、やめたほうがいいわよ
「……あなた、御坂さんじゃありませんの」
「みつ御坂さん！？」

一人の上級生らしき人物は、美琴の姿を捉えると一^二者^一様の反応
を示した。

ついでに、その間に挟まれていた下級生っぽい女の子は、双葉の方へ逃げてきた。ほう、と溜息をつく。

「災難だつたねー」

双葉が声をかけると、「はつー？」と素つ頗狂な声を上げてビビ
らせてしまつた。何故だ。

その間も、美琴が場を収めている。

彼女はこいつのに長けているから、まかせても大丈夫だらう。
それより。

「どうして、派閥なんかに入らうとしたのかな？」

双葉はこいつと笑つてその子に話しかけた。その子はピクピク
しながら

「強引に勧誘されて……」と答える。

ふうん、と双葉は心の中で思つ。読心能力を使つたところ嘘をつ
いているわけでもない。

これは潰し決定かな、と双葉は美琴にテレパシー通心をした。美琴の心を読
み取ると、おつけ、分かった”と返ってきた。

「そつか、怖かつたね。もう大丈夫だよ」

「えつ？」

その子の疑問には答えず、美琴の方へ歩き出すと、美琴の方はそ
の場は一時収まつたらしい。一人の上級生らしき人物はそれぞれの
教室へ出ていつてしまつた。

「美琴、お疲れ」

「あーあ、めんどくさいつたら

双葉は美琴の頭を「美琴はえらいねえ」とわしゃわしゃと撫でま
わした。「ちよつやめなさい」と美琴から非難の声があがるが気に

しない。ついでにそれをついやめしがつに眺めるほかの生徒の視線も気にしない。

と、そこでチャイムがなった。

「あ、授業だね」

双葉は名残おしそうに美琴の頭から手を放した。

美琴の髪の毛はさらさらなので触っていると気持ちいいのである。

「じゃあ行きましょうか」

美琴の提案に、うん、と双葉は頷き、後を追つ。周りに散っていた野次馬も一人に見習つようにそれぞれの教室へと入つていった。

ついでに、この後、美琴と双葉の手によつて一つの派閥が壊滅したことを、一一に記しておこう。

第一話 夜中のたわごとのない事件

お兄ちゃんって優しいんだなー。（後書き）

「お兄ちゃん、あなたがここですか？」
「うん、あとはキャラクの台詞です。

第3話 スーパーの帰り道、そして異変　お兄ちゃん（前書き）

一日だけです。ちょっとこれから長くなりそう……かも?
最初らへん書き直しました。さすがにキャラ崩壊かなーと（笑）

第3話 スーパーの帰り道、そして異変　お兄ちゃん。

双葉はうぬぬ、と唸つていた。

現在スーパーでお買い物中なのである。と、今日はお肉の特売だつたことを思い出し、買いに来たのだが

「うーん、こっちのお肉とこっちのお肉じゃ何が違うのかなあ……？」

左右に握られた肉の袋を交互に見て、双葉は首を傾げた。

右は百グラム180円。左は百グラム120円。補助金をかなり貰つて割とブルジョワな双葉にとっては驚きの金額である。でもまあこれも社会勉強になるかなーと思って買いに来たのだが。分からぬ。同じ肉なのになぜ60円も違うのだろう?

双葉が数分も悩んでいることに気づいたのか、親切な人が声をかけてくれた。

「ああ、右の肉は身の部分が多くて左は油が多いんだ。だからこんなに値段が違うんだとさ。だから買うなら右の方がいいと思うぜ」「ふわっ！？あ、有難う！」やこやこ…」

双葉は左を棚に返しつぶこと頭を下げた。その人はいっていいつて、と笑う。
どうやら優しそうな人だ、と双葉は思い、自己紹介をすることにした。

「あの、私小鳥遊双葉つてぃいます。常盤台の生徒なんで常盤台に

用があるときはいつでも言ってください」

「常盤台？ 常盤台つづーとビリビリの……」 その人が言つた言葉に
双葉は首を傾げた。

「ビリビリ、ですか……？」

「うつちの事情、と慌てたように男の人は言い、

「俺は上条当麻つていうんだ」

「当麻さんですか。成程です」

その当麻さんは「……うつー、俺の知り合いにこんな常識人がで
きるなんて……」となにやら感動していた。

双葉はさらにこの当麻さんの設定を付け加える。なんか変な人だ、
と。

そんな設定^{レッテル}を貼られていることに露ほど氣づかず、当麻と名乗る
男はその後双葉に”上手な買い物の仕方”を教えてくれた。

普段あまり何も気にせず買い物をしている双葉にとって全てが驚
きである。

「当麻さんつて凄いんですね。私、知らないこといっぱい勉強に

なりました」

「はは、あんまり金ねえからなー、レベル〇つて

「レベル〇……ですか」

双葉は驚いたように声を挙げた。

当麻ははは、ともう一度笑う。

「ま、能力は個人の才能だしなー、しょうがねえよ」

「吃驚です……レベル〇つてスキルアウト作つていつも能力者を
襲うか暗い目をしているだけかと思っていたので……こんな優しい

人がいるとは驚きです」

「……能力者って本当にスキルアウトに絡まれやすいんだな……」

会計を済ませると　その金額はいつもの5分の1だった　途中までは一緒にいたことが分かり一緒に帰ることになった。と、その時。

「……オイ、なんが帰りが遅いと思つたら……テメエ、彼氏でもいたのかよ」

「あ、お兄ちゃん!」

コンビニに行つてコーヒーを買つてきた帰りだつたのだろう。一方通行がコーヒーの入つた袋をぶら下げながら双葉の方へ来た。双葉も嬉しそうに駆け寄る。もちろん、当麻を引き連れて。

「あのねーこの人双葉のお買い物沢山付き合つてくれたのーなんといつもーそこで双葉は手の形をパーに、つまり5本突き立てた。

「5分の1の金額で収まつたんだよー」

「……へ?……そりやアよかつたことで」

「うんつー」

ついでに、この義理兄妹が和やかに（？）話している横で、当麻は（何この人ーー!?白髪赤目つて……明らかに堅気じやないんですけどーー?）

と内心ビクビクしているのに双葉は気づかない。読心能力は特に発動優先順位が高くないからだ。

「え、えと俺もつ帰つていいでせう?」

「ええー、双葉の家でご飯食べていきませんか?」

「いや、その……遠慮させていただきます!」

当麻はぱたぱたと両手を振った。もつ関わりたくない。妹はともかく兄貴さんの方は。

「じゃ、さいなら!」
だけ言ひと当麻は駆け出した。元から不幸の自分がさらに不幸の根源になりそつなものに突つ込む道理はない。

これが、学園都市の最強と最弱が出会った日だつた。

「どうわけなの

「……オマエ、毎日学校でそんなんやつてんのかよ……

今日の学校での出来事を双葉は一方的にまくしたてた。それを聞いて一方通行は呆れかえる。

同時に、双葉のいう”第三位”がかなり常識的な人間であることに毎度驚かされる。

力を持つものは、大抵の場合ぶつ飛んでるというのに。

「ねーねーお兄ちゃん、あのさーずっと聞きたかったんだけどねー

双葉は唐突に言い出した。なンだよ、と一方通行は聞き返す。

「どうして双葉はお兄ちゃんの能力を扱えないのかなあ？」

「知ってるわけねエだろ」

「だねー、変だなあ……演算能力の限界を超えてるのかな？だとしても”方向転換”的レベル4クラスの力は操れるはずなのにねえ」

「つーかそんなん自分で調べろよ

「調べても分かんないから聞いてるんだし！ま、いつか」

双葉の能力の最大の利点は”「コピーできる”ことなのに。
『^{スキルメモリー}能力記憶』。能力者たちから発せられる微弱な力 A.I.M 拡散力場 を敏感に感じれる双葉の潜在的力があつたからこそ成り立つた能力だ。それがなければ双葉の能力レベルはかなり違ってしまう。

そんな彼女ですら なぜか、一方通行の能力だけはコピれない。まあ、確かにどうでもいいことなのではあるが。

「さて、お兄ちゃん今日はだね！な、なんとビックバンサイズのハンバーグなのだよ！」

「本当に作れたら地球破壊してンぞ」

「ふふ……発火能力を使ってだね、適度にじっくり焼き上げるのがコツ！」

「超一部向けのレシピだなア オイ」

そんなあほらしい会話をしているときだった。

ブツン、と何かが切れたように双葉は足を止めた。

「？ どオした？」

一方通行も不思議に思つたらしく、双葉を振り返り、

「……、」

息を呑んだ。

一方通行が驚くほど、双葉には感情というものが、一切うつっていない。

空。
無。

空っぽの、何も映らない田で一方通行を捉え
その田と同じように、平淡な声でいった。

「……お兄ちゃん、私、美琴のところに言つてくるね。もしかした
ら、今晚、戻らないかも」

そして、その瞬間姿が消えた。空間移動でも使ったのだろう。
一瞬だけ一方通行は迷い　　それから、怒声を押さえ込みながら
呟いた。

「チツ、どおなつてやがるあのガキ」

端整な顔立ちが崩れるほど顔をしかめ
一方通行は、あてもなく走り出した。

第3話 スーパーの帰り道、そして異変　お兄ちゃん。（後書き）

番外個体書きたい番外個体書きたいでも需要ないですねで書くの諦めます。ミサカワースト大好きすぎる。双葉に一瞬ミサカワーストっぽいの混ぜようと思つたけどやめました。今思えば正しい判断だった気が（ry

主人公設定（前書き）

そろそろ書いとこつかなーと思いまして。

主人公設定

< 小鳥遊双葉 >

常盤台中学の二年生、レベル4の『能力記憶』

『レベル5候補生^{レベルアップ}育成プログラム』の一人。優秀な成績を収めたもののレベル5には到達出来なかつた。でもあと一歩のところまではいつた。

一方通行の義理妹。

若干天然の傾向があり。しかしやることは時々えげつない。しかも無自覚だからたちが悪かつたりする。

真面目な性格なので毎日能力上達の練習をしている。

という訳でちょっと書いてみました。絵にするとイメージ固定しやすいので。

……一つ言いますが作者は一切絵がうまくありません。ド下手です。

絵柄は新約以降ができるだけ真似してみました。

> i 3 5 9 1 5 — 4 5 0 4 <

第4話 今日も、めんべくせ。

結論からいつて、双葉は一晩探し回つても見つからなかつた。
まあ、あてもなく走つていたのだから当然といえば当然なのだが。
で、くたくたになつた一方通行が家に帰ると
いつもと同じような、料理をする音と、それに伴い発生する
いい匂いが台所から漂つてきた。

「……だからあのガキは……チツ」

どうこいつことなのだろう、と一方通行は苛立ちをできるだけ抑えて考える。

双葉の意思が関わつていたとは思えない。あの、空っぽの有様をみれば、それは明らか。
ならば

（洗脳系の能力者か？ あのガキに一体なんの理由で……いや、あのガキはかなり利用価値のあるレベル4か……つまり、その可能性も無視できないつて訳ですかよオ）

めんべくせくなつた、と溜息を吐くと同時に心の奥底では一応心配する。

それは、彼の心情の変化か。

2ヶ月たつて、双葉に出会つ前と今では 自分ですり、変わつ

てこると思つから。

ともかく、双葉だ。

彼女と、”昨日の行動”には何がある？因果関係は？

そして、それは、”この生活”にどう影響を及ぼす？

そんなことを考えつつ、台所の方へ向かうと、双葉は「あっ」と

気づいて笑顔を向けてきた。

やはり、昨日のことはすっかり頭から抜け落ちてこいるのか。

「あ、お兄ちゃん！また朝帰り？感心しないなーもー」

「……オマエにだけは言われたくなエンだよ……」

頭を抱えてうずくまりたい衝動をおさえながら双葉が手渡すご飯を受け取る。

今日は思考を変えてカレーらしい。なんだ、普通だな……と思つたら

「ふふ、スパイスは特性なんだよー」

「……だからその凝り性はどこのだれせんからなのなんだよ……」

一口入れてみるとこれが、うんまあ流石なんといつが、美味しい。一晩中動き回った体にカレーはキツかつたが、こつもどおり完食。

「オレ寝るから起こすンじゃねエバ」

「へ？はーい。おやすみなさい。じゃあ、私学校行つてくるから
「へいへい」

ソファに寝そべつて瞼を閉じると　すぐに、眠りに落ちた。

それをみて、双葉は笑う。

昨日とはうつてかわった　優しい、笑いで。

「……もオタ方か……」

のそりと一方通行は起き上がつた。
そろそろ双葉が帰つてくる頃か。
もうすっかり暗くなつた部屋には、自分以外誰もいない。当たり前か。

双葉と生活するようになつてから、随分と人がいることに慣れてしまつた。

「……さアて、出かけますかア」

ぼそりと独り言のように呟いて、一方通行は表へと出る。
理由はいたつてシンプルだ。双葉が昔いじくりまわされていた研究所に、直接尋ねる。

双葉なら眉をひそめて「それはダメだと想つよ」というようなことを実行する、というわけだ。

その前に、双葉の成り立ちでも調べてみるか。
そっちの方が現実的かもしれない。まず、双葉が弄り回されたいだ研究所の名前も知らないわけだし。

「めんどうせH……」

少し、思う。

なぜ自分はこんなことをしているのだらう、と。

あの少女は勝手に来て勝手に居座つて勝手に義理妹になつた
どうでもよい、人間なのに。

確かに能力は貴重だ。珍しいとも思つ。利用価値がある、とも。でも、レベル4。格下だ。

そんな相手のことが、なぜ、気になる。

そしてもし双葉が未だに弄り回されているとしたら　どうして、助けよう、だなんて。

「くつだらねエな……」

一方通行は鼻で笑つた。それは自身のことか、それとも別の何かに對してかは、分からなかつたけれど。

その時、ぱたぱたとこちらへ駆け寄る音が聞こえた。
彼がその姿に気づき、反射を切つていなかつたら　多分、その姿の主の体は粉々だつただろう。

「お兄ちゃん！ やつほー！」
「おまつ危ねエ！」

双葉が勢い良く一方通行の体に抱きついた。といつかほぼタックルだつた。一方通行の体が情けないと思いつつもぐらりと揺れる。崩れ落ちることはなかつたが、一三歩後ずさる。さらにその双葉を追いかけてくる音も聞こえた。

それは、双葉と同じ常盤台の、茶髪の少女。

「ちょっとーなんのよ急に走り出したりしてー！」
「美琴ー、この人が双葉のお兄ちゃんだよー」

双葉は一切人の話を聞かないで一方通行の紹介をした。
美琴、といふと。

双葉がよく話す、第3位の超電磁砲レールガンか。

成程コイツがねエ、と御坂美琴の方を不躾にじろじろ見ていくと、

「……お兄ちゃん人の友達を睨まなくてもいいじゃん…そりや、
ちょっとはタックルしたことは謝るけど……」

「ちょっとかよ」

一方通行は呆れたように言い、双葉の体をひっぱがした。
双葉は頬を膨らませながらも少し嬉しそうだ。
そしてくいきいと御坂美琴の袖を引っ張る。それにより、御坂美
琴は少しお辞儀をした。

「御坂美琴です。双葉のクラスメイトです」

「……あー、まあなんつーか、オマエがか……」

「?」

一方通行が呟いたのを聞いて、御坂美琴は首をかしげた。
双葉は嬉しそうに御坂美琴に一方通行を紹介する。

「えとねつーこの人が双葉の義理兄で　えーっと、名前なんだっ
け?」

「忘れた」

「なんで忘れるのよもうー。美琴は知ってるかな? 一方通行って言
うんだ」

「アクセラレータ?」

双葉の言葉を不思議そうに御坂美琴は反復し　　ああ!と声をあげた。

「学園都市第1位の!」

「……セーカイ」

へえ、と御坂美琴はじろじろと一方通行を見た。どうりでかと言えば好戦的に近い瞳だ。

それを双葉は慌てて止める。

「美琴ーーお兄ちゃんに戦つたら怒るからね。お兄ちゃんも巻き込んで」

「なンでだよ」

「はいはい、ブラコンはもういいから」

「お兄ちゃんがシスコンなんだよ」

「意味繋がつてねエからな！？ふざけハエンのかテメエー」

そんなこんなでわいわいがやがや。

そろそろ日が暮れたので帰ろうといつ話になつた。

「じゃあ、まつたねー美琴ーー」

「どうせ明日会えるけどね」

双葉はぐるぐると一方通行の横を歩いている。

そのとき、一方通行はふと思つた。

「こつなり、いけるかもしねない。」

『今日、夜8時、またここで』

そう小声で伝えると、御坂美琴は不審な顔で双葉を向つてきた。当たり前だ。

一方通行はあくまで双葉に聞かれないよう言つた。

『双葉のことだ』

「……」

そう言つと、御坂美琴は「ぐりと頷いた。
そして、そのまま別れる。

「お兄ちゃん、今日は何がいい？」

「軽いもン」

「分かつた、じゃあ天ぷらね」

「……嫌がらせだろオガソレ」

双葉はにひひ、とちよつとだけ意地悪い笑みを浮かべた。一体誰の真似をしているのやら。

一人の影は夕暮れに混じり、濃く、そして長く伸びていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162y/>

とある科学の能力記憶

2011年11月30日21時48分発行